

# 日本語母語話者の自慢表現の選好性に関する意識調査

中内 遥 (関西大学大学院生)

## 1. はじめに

本研究では、自慢の語り手が「自慢をする」という意図がある場合の発話について、受け手の印象や表現の選好性を明らかにする。加えて、「自慢」が会話の参加者の友人関係に対してどのように関わりを持っているのか考察を行う。

## 2. 研究の枠組み

### 2.1 自慢行為の認定基準

「自慢」の語用論的な側面を捉えるために、まず、蒲谷・川口・坂本 (1998) の行動展開表現の類型を参考に、行動展開表現は、「だれが『行動』するのか」「だれがその『行動』の『決定権』を持つのか」「だれがその『行動』によって『利益』を受けるのか」という点で類型化されている (蒲谷・川口・坂本 (1998))。蒲谷・川口・坂本 (1998) はこれらを「行動」、「決定権」、「利益」という観点としてまとめており、「依頼表現」を「行動」=相手、「決定権」=相手、「利益」=自分と示している。

また、山岡 (2008) は依頼の聞き手の行為を《協力》とし、《依頼》の発話機能を整理した。発話の参加者が《依頼》と《協力》を行う際の語用論的条件として、山岡 (2008) は、《依頼》は《協力》の話者が実行可能な行為であること、《協力》の話者が《協力》を行うか自明ではないこと、《協力》を行うかは《協力》の話者が決める権限を持っていること、《協力》の話者が行う《協力》は《依頼》の話者への与益であること、《依頼》の話者は《協力》の話者が《協力》を行うことを望んでいることという5つの条件をあげた。

この依頼の行動展開表現や発話機能は、参加者の関係、目的、語用論的条件の点から、自慢と類似していると言える。よって本研究では、《自慢》の話者は相手から《承認》されることを望み、《承認》の話者は《承認》を行うかの決定権を持ちつつ《自慢》の話者への与益のために《承認》を行うという条件を備えた上で、自慢の語り手が自分を褒めて受け手に誇り、受け手に対して自慢の承認を期待する行為を自慢とみなす。

### 2.2 調査概要

本研究では、自慢の発話の選好性を比較するために、表現のタイプ別に設定した発話に対して、それぞれどのような印象を抱くのかという点に着目した自記入式アンケート調査を行った。調査時期は2022年5月～2023年2月、回答者は10代後半～20代後半(15歳～29歳)、有効回答数は184件である。

アンケートでは、まず、大学生Bが同じく大学生の友人Aに対し、芸能人Zと高校生のとときに同級生であったことを自慢するという設定(この設定を以後「知人自慢」とする)の会話を読む。会話はAが芸能人Zと偶然会い、一緒に写真を撮ってもらったと切り出して始まる。それにBが「自分は高校の同級生であった」と返し、更にAが「えっ本当?」と尋ねてくるという流れである。このAの発話に対して、回答者は自分がBであり、Aに対して自慢の意図がある場合、どのような返答をするか自由に記述する(設問(1))。また、自慢の意図があるBの返答として、返答a「うん、すごくない?」、返答b「結構喋ったことあるし、連絡先も多分まだあるよ」、返答c「でも何回か話したことある程度だし、向こうは覚えてないと思うけどね」、返答d「同じクラスだったってだけだから、ほとんど絡みはなかったよ」、返答e「そう、同じクラスだった」という発話例について、それぞれ言うかどうかを回答する(設問(2))。

自慢の発話例は中内(2023)の調査を参考に、自慢したい内容を良いものとして語る積極的表現、自慢したい内容を控えめに語る消極的表現、自慢したい内容に至る前提の状況を説明する状況説明的表現の3つのタイプに分類した。返答a・返答bは積極的表現、返答c・返答dは消極的表現、返答eは状況説明的表現として作例したものである。加えて、自分がAとして、Bに返答a～eを言われたときに、それぞれ自慢の意図を感じるかどうか(設問(3))、不快かどうか(設問(4))も選んで回答する。

3章では、設問(1)の回答を分類し、知人自慢で出現する機能的要素を整理する。4章では語り手、受け手の両方の視点を組み

合わせた回答傾向を、3章で整理した機能的要素を用いて分析し、自慢表現に対する意識を考察する。

### 3. 知人自慢の機能的要素

本研究では、自慢行為の際に現れた発話を分析するにあたり、熊谷・篠崎(2006)のコミュニケーション機能の分類を参考にする。熊谷・篠崎(2006)は、依頼場面での発話を相手に対する働きかけの機能を担う最小部分の単位である「機能的要素」を働きかけの内容によって分類し、その上位分類を「コミュニケーション機能」とした。これを参考に、設問(1)の回答を、「発話タイプ」と「機能的要素」によって分類した。表1は回答に含まれる機能的要素と回答例を共に示したものである。回答中に複数の要素が見られる場合は該当する部分に下線を用いている。表中の件数は出現数、%の数值は有効回答数(184件)に対する比率(少数第一位を四捨五入)である。

表1 「知人自慢」の機能的要素一覧

発話タイプ	機能的要素	回答例	出現数
積極的表現	《賞賛要求》	すごくない？	24件(13%)
	《情報所有の提示》	連絡先も知ってるんだよね～	66件(36%)
	《知人の感想》	いやーあいつ高校時代からやっぱ普通の人とは違ったわ	12件(7%)
	《知人との体験》	うん、 <u>何度か話したことあるよ</u> 。	21件(11%)
	《関係提示》	そう、 <u>結構仲良かったんだよねー</u>	11件(6%)
消極的表現	《知人の控えめな感想》	割と喋ったことあるけど、 <u>意外と普通な感じの子だよ～</u>	6件(3%)
	《控えめな関係提示》	そこまで親しいわけじゃなかったけどね	7件(4%)
	《無関係の提示》	ガチ、 <u>ただの同級生だけど</u>	8件(4%)
	《相手への与益》	うん、ほんまほんま、 <u>卒アルとかみる？</u>	6件(3%)
状況説明的表現	《過去の同所属の説明》	うん、 <u>同じクラスになったことあるんだー</u> 。	34件(18%)

本調査では、ひとつの回答の中に複数機能的要素が含まれている場合、それぞれを1件として数える。また、本調査では機能的要素としてカウントしていないが、回答の中には「そうだよ」などの返答やあいづちのみの回答も見られた。

積極的表現に当たる知人自慢の機能的要素は5つに分類できた。《賞賛要求》は受け手に「すごいね」などの賞賛を求める機能である。《情報所有の提示》は受け手が持ち得ない知人についての情報を持っていることを語る機能で、連絡先や写真を持っていることを伝えているものを分類している。《知人の感想》は知人に対して良い感想を受け手に述べ、知人を持ち上げることで語り手の経験の価値を高める機能である。《知人との体験》は受け手が持ち得ない知人との体験を語る機能である。《関係提示》は知人と語り手の仲が良かったことを語る機能である。以上の積極的表現には、自慢したい内容を高めて受け手と語り手の立場の差を強調し、受け手の羨望を煽るものが多い。

続いて、消極的表現には、4つの機能的要素が見られた。《知人の控えめな感想》は、知人に対して控えめな感想を述べ、知人を持ち上げないことで語り手の体験も控えめに語る機能である。《控えめな関係提示》は親しさをアピールせず、関りが少なかったことを述べる機能である。《無関係の提示》は関りが全くなかったことを述べる機能である。《相手への与益》は「知人の写真を見せる」「知人の連絡先を教える」など、受け手が得をするような行動を提示する機能である。知人自慢での消極的表現では、語り手が知人を高めず控えめに語ったり、自身と知人は距離があった関係として語ったりすることで、受け手と語り手の立場に大きく差がないことを示し、自慢を薄めるものも多く見られた。

状況説明的表現では、《過去の同所属の説明》のみが見られた。《過去の同所属の説明》は「同じクラスだった」など、有名人と知り合いだったという内容を語るにあたっての前提的な情報を説明する機能である。これは自慢の前段階的なもので、この機能的要素が含まれる発話を更に自慢を強めていく足がかりとすることが可能である。また、状況説明的表現だけで発話を終了することで、受け手に興味を持たせてより多くの情報を促させる(自慢に興味のある反応)ことで、自慢を続けやすくなる働きもある。

設問(1)は、設問(2)～(4)と違い、自らの返答を1つに絞って選択しなければならない。その前提で出現数に着目すると、消極的表現はいずれの機能的要素も出現率が5%以下と低く、知人自慢では使われにくいと言える。これは友人同士の知人自慢という場面が、自慢を薄める表現より、自慢したい内容を高めたり、自慢の下準備を行ったりする表現のほうが適していると判断される傾向にある「自慢しやすい」場面だからだと考えられる。

また、設問(2)～(4)で用いる返答a～eの機能的要素を示すと、返答a「うん、すごくない？」《賞賛要求》、返答b「結構喋

ったことあるし、連絡先も多分まだあるよ」《関係提示》／《情報所有の提示》, 返答 c 「でも何回か話したことある程度だし、向こうは覚えてないと思うけど」《控えめな関係提示》, 返答 d 「同じクラスだったってだけだから、／ほとんど絡みはなかったよ」《過去の同所属の説明》／《無関係の提示》, 返答 e 「そう、同じクラスだった」《過去の同所属の説明》となる。次章では、返答 a～e の選好性と機能的要素の関わりについて述べる。

#### 4. 自慢表現に対する選好性

表 2 は、設問(2) (「言うかどうか」), 設問(3) (「自慢の意図を感じるかどうか」), 設問(4) (「不快かどうか」) の回答結果である。表中の件数は選択された数, %の数値は有効回答数 (184 件) に対する比率 (少数第一位を四捨五入) である。

表 2 「言うかどうか」, 「自慢の意図を感じるかどうか」, 「不快かどうか」 回答結果

設問	質問内容	選択肢	積極的表現		消極的表現		状況説明的表現					
			返答 a	返答 b	返答 c	返答 d	返答 e					
設問(2)	(語り手として) 言う	言う	102	55%	51	28%	140	76%	135	73%	134	73%
		どちらともいえない	25	14%	39	21%	22	12%	21	11%	33	18%
		言わない	57	31%	94	51%	22	12%	28	15%	17	9%
設問(3)	(受け手として) 自慢の意図を感じる	強く感じる	68	37%	118	64%	7	4%	5	3%	11	6%
		やや感じる	62	34%	49	27%	50	27%	24	13%	64	35%
		特に感じない	54	29%	17	9%	127	69%	155	84%	109	59%
設問(4)	(受け手として) 不快	不快	36	20%	45	24%	4	2%	3	2%	5	3%
		やや不快	43	23%	61	33%	27	15%	12	7%	28	15%
		特に不快ではない	105	57%	78	42%	153	83%	169	92%	151	82%

表 2 を見ると、「言う」が 50%を超えているのは返答 b 以外全てである。「意図を感じる／やや感じる」を合わせたものが 50%を超えているのは返答 a・返答 b, 「不快／やや不快」を合わせたものが 50%を超えているものは返答 b のみである。

以上の 3 つの設問の回答結果を総合的に判断するため、「言う」「強く感じる」「不快」の結果が 50%以上のものを「○」, 20%以上 50%未満のものを「△」, 20%未満のものを「×」として表 3 にまとめる。

表 3 「言うかどうか」, 「自慢の意図を感じるかどうか」, 「不快かどうか」 回答の傾向

	積極的表現		消極的表現		状況説明的表現
	返答 a	返答 b	返答 c	返答 d	返答 e
(語り手として) 言う	○	×	○	○	○
(受け手として) 自慢の意図を感じる	△	○	×	×	×
(受け手として) 不快	△	△	×	×	×

表 3 を見ると、返答 b のみ「言わない」、他の返答は「言う」傾向にある。積極的表現が「言わない」となるのは「明らかな自慢は避けるべきだ」という体感の通りだが、返答 a は積極的表現でありながら「言う」傾向にあった。この結果は各返答の機能的要素が持つ「立場の距離の調整」の働きが関わっていると考えられる。

友人関係という近い立場にある者同士の会話では、相手と自身の立場が違うことを示したり、上下をつけたりすれば、友人関係を揺るがすことにつながる。積極的表現の返答 b 《関係提示》／《情報所有の提示》は受け手が得られないような経験について述べ、その経験の価値を高めることで受け手との立場の差を現段階からさらに広げて優位性を示す働きがある。一方、消極的表現の返答 c 《控えめな関係提示》, 返答 d 《無関係の提示》は芸能人 Z と語り手の関係を遠く語ることで、受け手と語り手の立場に大きく違いがないことを示している。そして、返答 a 《賞賛要求》は確かに自分と相手の立場に差があることについて誇らしさを示してはいるが、働きとしてはその差を認識させるのみで、それ以上立場の差を広げることはない。このように、自慢は、優位性を示すことで互いの立場を遠ざけたり、反対に立場の近さを示したりする働きがあり、自慢談話の参与者はその働きを意識して使用の選択を行っていると言える。

また、いずれの返答も「自慢の意図を持った発話」とされているが、返答 c, d, e のように「自慢の意図を感じない」上に「言う」とする傾向が見られ、一見矛盾しているように感じる。しかし、これは語り手としてなるべく自慢として受け取られないような表現を用い、受け手としてもそれをなるべく自慢と受け取らない意識を持って自慢行為を扱っているからではないかと考えられる。

## 5. まとめ

自慢の語り手と受け手の両方の立場での使用意識について自記入式アンケート調査を行った。自由記述式回答の結果から自慢の機能的要素を整理した。選択式回答では同じ積極的な表現でも立場の差の広げの程度が低ければ許容度は上がったことから、自慢に対して積極的な表現かどうかという点以上に、それぞれの返答に含まれる機能的要素が語り手と受け手の立場を広げる働きがあるかどうかという点によって受け手としての感じ方に変化が現れることが明らかになった。

## 参考文献

- 市川真未 (2019) . 「《賞賛》が「マウンティング」に作用する条件」『日本語用論学会第 21 回大会発表論文集』 14, pp. 1-7, 日本語用論学会.
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵 (1998) . 『敬語表現』大修館書店.
- 釜田友里江(2017). 「日本語会話における共感の仕組み—自慢・悩み・不満・愚痴・自己卑下の諸相—」名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化研究専攻博士論文.
- 熊谷智子・篠崎晃一(2006). 「依頼場面での働きかけ方における世代差・地域差」国立国語研究所『言語行動における「配慮」の諸相』, pp. 19-54, くろしお出版.
- 中内遥(2023). 「自慢の言語表現の語用論的分析」『国文学』 107, pp. 190-204, 関西大学国文学会.
- 山岡政紀 (2008) . 『発話機能論』くろしお出版.